慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『孤独について』 (抄) : 第5章 孤独の持ついくつかの欠点
Sub Title	Ueber die Einsamkeit (Auszug)
Author	Zimmermann, Johann Georg 中村, 大介(Nakamura, Daisuke)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.翻訳特集号 (2021. 5) ,p.61- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20210531-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『孤独について』（抄）

第 5 章　孤独の持ついくつかの欠点

ヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマン
訳：中村大介
（慶應義塾大学大学院後期博士課程）

結局、こうした孤独への衝動すべてが[1] 健全な理性と常に折り合うわけではない。また、温和なこころ、世間を穏やかな影のように滑らかに進んでいくこころの有りようとも常につながっているというわけでもない。ごく普通にひとを避けているときに孤独が起こす害はしれたものだが、世間や交際から頑固に距離をとり続けていると多くの害が生じる。

孤独なひとびとの欠陥がすべて孤独から生じているというわけではない。その他の原因でそうした欠陥に通じることもあろう。しかし、悪しき想念や衝動をこの孤独に多く持ち込んでしまうと、孤独はいっそう甚大な害をもたらす。こうしたすべてのことを慎重に研究・吟味すれば、妄説を唱える者[2] が孤独を礼賛するために教えこんだりしていることなどをすべ

---

1) ［訳注］第 4 章末尾の内容を受けている。哲学者たちが自分たちの住まう国の統治形態に不満を抱き、孤独な生活に身を投じたことなどが伝えられている。Vgl. Zimmermann, Johann Georg: Ueber die Einsamkeit. 1. Theil. Leipzig 1784, bes. S. 346-350.

2) ［訳注］ここは原文では「妄説（Schwärmerey）」とあるところだが、「妄説を唱える者」に意訳した。『孤独について』第 2 巻の目次を見れば、このことばが、ツィンマーマンの論敵として知られるヤーコプ・ヘルマン・オーベライト（1725-1798）を指しているとわかる。Vgl. Zimmermann, Johann Georg: Ueber die Einsamkeit. 2. Theil. Leipzig 1784, S. III. さらに、『孤独について』第 1 巻に、「狂える世界制圧者オーベライト（Der wüthige Weltüberwinder Obereit）は、孤独についての絵空事（einen Roman über die Einsamkeit）を書いてわたしを攻撃したことがある」という記述がある。Vgl. Zimmermann: 1.Theil. a.a.O., S. VII. なお、オーベライトの伝記的情報に関しては、次の文献を参照。

てわたしが棄却することにもなろうし、研究・吟味した分だけ孤独のもつ本当の美点がはっきりと浮かび上がってくるだろう。

しかし、その反応としてまたその妄説を唱える者はわたしを激しく呪うだろう。というのも、そういう手合いにとっては、ひとが自由に観察したり、わずかばかりの理性の使用をしたりした場合にも、目のなかにとげが入っているように感じるからである。諸君は彼の味方でなければ、彼の敵であることになる。彼が語っていることをすべて信じなくてはならない。それがたとえ彼自身も理解していないことであってもだ。自分の夢想を彼は根源的経験[3]と呼ぶ。彼が話しているというのは、ただ考えもなくしゃべっているということで、夢想したことを信仰しているのだ。みずからとあらゆる善きものとを全て妄想の犠牲にして、自分と考え方を少しでも異にする者、一緒になって猛り狂って走り去ってしまおうとしない者には、誰にでも面と向かって怒りの鉢[4]をぶちまけてしまうのだ。

Vgl. Dobras, Werner: Ober(r)eit, Jakob Hermann. In: Neue Deutsche Biographie. Bd. 19. Berlin 1999, S. 382 f. また、ツィンマーマンとオーベライトの関係については、以下の文献を参照のこと。Vgl. Minor, J. (Hg.): Fabeldichter, Satiriker und Popularphilosophen des 18. Jahrhunderts (Lichtwer, Pfeffel, Kästner, Göckingk, Mendelssohn und Zimmermann). Deutsche Nationalliteratur. Bd. 73. Berlin u. Stuttgart o. J. S. 342f. u. 346f.

3) ［訳注］上述のオーベライトが使用したことばに対するあてこすりである。今回訳した個所でも、本文中では実名こそあげないものの、ツィンマーマンは一貫してオーベライトに対して批判的な態度をとっている。訳注の 7 も参照のこと。ここでは参考に、オーベライトの著書で「根源的経験（Grunderfahrung / Grund-Erfahrung）」ということばが登場する個所を数例あげておく。[Obereit, Jacob Hermann]: Die Einsamkeit der Weltüberwinder nach innern Gründen erwogen von einem lakonischen Philanthropen. Leipzig 1781, S. 143; [Obereit, Jacob Hermann]: Die Natur und die Heiden über Steinbart. In Gesprächen beym Promeniren. Erster Beytrag zu Steinbarts Zusätzen und Bestätigungen seines Systems der Glückseligkeit. Leipzig 1782, S. 110f.

4) ［訳注］『ヨハネの黙示録』第 16 章 1 節には、「そして私は神殿から大きな声が七人の天使に言うのを聞いた、『行って、神の（怒りの）激情の鉢を地に注げ』と」とあり、ここはこれを踏まえた表現であろう。田川建三訳著『新約聖書訳と註　7　ヨハネの黙示録』作品社、2017 年、33 頁参照。

どのような場合に孤独は害をなすのか、どのようなときに孤独は善き実を結ぶのかをいうためには、さまざまな状況下における、そしてさまざまな頭のなかおよびこころのなかにおける、孤独の悪しき作用と善き作用とを観察・吟味しなければならない。なにによって孤独が世間との交流と同じくらい満足をもたらすか、どのような状況であれば・どのような目的に向かってであれば人間が人間を避けようと企てることを認めてよいのかが研究されなければならないのだ。きわめてありふれた世間づきあいから遠ざかるだけでも、みずからに対して多くの害をもたらす。一方で、孤独はうまく使えば、自分自身に果てしなく多くの善いことをもたらしもする。こうしたことはすべての人間に対してというわけではないが、多くの人間に対して当てはまる。わたしがもし、先人たちのようにここで孤独についての絵空事[5]を書こうとしているのに過ぎないのならば、かくも素晴らしい素材を取り扱うにあたって、孤独の欠点については黙っていただろう。

人間というものはひとり無為に過ごしていると、流れを失い淀んで、腐敗した水のようなものになってしまう。することがなく平穏であっても緊張が大きすぎても、心身ともに不健全になるのだ。

人間のからだのどの部分も、気晴らしとなる休みがなく働いていると突然疲弊する。人間の精神も常にひとつのことだけをしていたり、常に同じ対象を見ていたり、常に同じ仕事をしていたり、常に同じ重い荷車を引いていると、同じく疲弊するものである。孤独は、自分の内面に対峙・対決することが病弱ゆえにもはやできないような人間には重圧となる。こうした人間は、どんな仕事をしていても、義務や情念で活力を得られないとなると、その仕事に耐えられない。精神の最後の火花が、人付き合いもなくやることもない静けさのなか、不満とメランコリーのうちに消えてしまうのだ。そんなときこそ、善き友人を求めるときがやってくる。そして再び、静かな活動への意欲と自分の喜びを感じる気分を取り戻すのだ。

---

5) ［訳注］原語は Roman ということばで、ツィンマーマンの論敵オーベライトへのあてこすり。訳注の 2 にて示した通り、ツィンマーマンは、オーベライトが著書で自らの意見を徹頭徹尾誤解しているとし、オーベライトの著書を「孤独についての絵空事（einen Roman über die Einsamkeit）」と表現していた。Vgl. Zimmermann: 1. Theil. a.a.O., S. VIIf.

気晴らしもなく回復もなく孤独で、そのうえに骨を折ることに長く耐え得る力がないとなると、人間は柔軟でなくなる。そうした人間の考えは固く・融通の利かないものとなる。他人の洞察や意見にはもはや注意を払わなくなると、たちまち自分の洞察や意見がなににもまして重要だと思い込むようになる。最終的には、彼はおのれ以外の何者も評価しなくなるのである。世間との交際において、反論を受けたり、自分たちと同じようには考えないひとびとに会うことに慣れていたりすれば、人柄や立ち居振る舞いによい影響があることは明白である。

孤独な状態にあると誰もが独善的になり、それによって孤独は間違いなく危険なものとなる。田舎に住んでいても、こころは常に都会と共にある若きご婦人方が、すべてのことに対して見下すようにして手厳しく発言することのなんと多いことか、なんと高圧的で独断的に、なんと頑固で辛辣に彼女たちが人間や物事を一方的に決めつけることか！　さびれた地方の田舎貴族たちにはありがちなことだが、彼らはきわめて不当な主張をかなり不躾かつ強情に押し通すことや、何事にも固陋な行動をとることにも慣れきっている。そのため、彼らと一緒になってなにかひと仕事やり遂げることはほとんど不可能である。プラトンは、孤独の行き着く先は高慢と強情と頑固さにほかならない、というがもっともなことである。まったく自分自身のためだけに、ひとりで生きている者は、自分自身のことが気に入っていれば、だれからも好かれようとしないものだからだ。そういうひとは、下僕や家畜が自分の命令に従うように、自分が望んだことはなんでも思い通りになると信じている。

同じように根絶できないものといえば、自らの気まぐれに対する孤独なひねくれ者の聖なる尊敬[6)]、そしてこのひねくれ者が自分自身を深く讃嘆していることである。彼は自分のあらゆる考えは神に由来したもので、天よりの直接の啓示であると信じ切って、自分と同じような考えを持たない

---

6) ［訳注］原文では „eines cynischen Einsamen heiliger Respekt“ という表現。『孤独について』第 2 巻の目次を見ると、ここの「孤独なひねくれ者」はオーベライトのことを指した表現であることがわかる。Vgl. Zimmermann: 2. Theil. a.a.O., S. IV.

者を、神の裁判席の前に罪人として召喚し、地上世界の最高審判者よろしく、自分の忌み嫌う地上の理性に対して、自分の経験神学[7]という火薬でもって雷霆を叩きつけるのである。

自分自身のなかに引籠ってあらゆる外的なものを冷笑して独立している人間は誰もが、孤独に耐えることができるだけの内なる力を得る。しかし、頑強な自己中心的性格、高飛車な自己満足、野暮な無遠慮さ、見下すような嘲弄と、理性的な人間たちのなかでなにかを成し遂げる能力の欠如、これらはこうした力にはつきものである。

ことによると、多くのはねっかえりの連中のことが思い出されるかもしれない。数年前に万有のしがらみをすべて無視して、5年と経たぬうちに[8]全ドイツを変化させ、その誇り高き指導のもとで、ドイツ民族によって周囲のあらゆる民族の、そして過去すべての輝きをうばい凌駕してみせると大風呂敷をひろげた者たちのことがだ。彼らはクニッパードリンク[9]の時代の作法でもって人間のこころに迫ったのだ。[10]彼らの意見に

---

7) ［訳注］「経験神学」もオーベライトの語彙。オーベライトがいうには、神について知るためには人間の薄弱な理性だけでは足りず、「経験神学（Erfahrungstheologie）」をよすがとせねばならないという。Vgl. [Obereit, Jacob Hermann]: Die Einsamkeit der Weltüberwinder nach innern Gründen erwogen von einem lakonischen Philanthropen. Leipzig 1781, S. 201. 別の著書でも、彼は「経験神学（Erfahrungs-Theologie）」について、「経験自然学（Erfahrungs-Physik）」と対比する形で論じている。Vgl. [Obereit, Jacob Hermann]: Beobachtungen über die Quelle der Metaphysik, von alten Zuschauern. Veranlaßt durch Kants Kritik der reinen Vernunft. Meiningen 1791, S. 113.

8) ［原注］1776年から1780年のあいだ。［訳注：同じ文にある「はねっかえりの連中（Sprudelgeister）」ということばは、いわゆる天才（Genie）、より具体的にはシュトゥルム・ウント・ドランクに属するひとびとのことを指している。Vgl. Minor: a.a.O., S. 398.］

9) ［訳注］ベルント・クニッパードリンク（1490頃-1536）はミュンスター出身の「再洗礼派」の人物。もともと商人であったが、その身振りと弁舌でひとびとを力強く引きつけ、煽動することができたため、暴動を起こす集団の先導者となった。宗教改革期の聖画像破壊運動にも参加している。Vgl. Cornelius: Knipperdollinck, Bernt K. In: Allgemeine Deutsche Biographie. Bd. 16. Leipzig 1882, S. 293-295; Stupperich, Robert: Knipperdollinck (eigentl. van

よれば、おれたちはヴィンタートゥーアからアストラハンまでの全ての民族を、犬や家畜さながらに支配している、とのことである。しかし、この5年をまたずして、こうした輝かしい希望はすべて潰れたのだ！ こうした暗い経験は直に、ルキアーノスにある、牛をも担ぐミロンが死後の世界に落ちたときのごとく、このルソーが砂地に蒔いた種から砂地で育った力強い子供たちが、一匹の蠅すら追い払うことができなかったことを露呈したのである。[11] 彼らはやれるだけやってみたのだ。しかし彼らはルソーでもなければフランクリンでもなかった。人間の社会にあっては、なににもかみ合うことができず、動いてぶつかるとその機構全体を混乱させる、歯のない歯車も同然であった。

あらゆる世間づきあいから遠ざかって、陶酔的な孤独のなかで自己愛による激しい発作を発揮し、自分に力があることを痛々しくも夢みているような若い粗野な者のあいだで蔓延しなければ、いとわしい天才病もドイツでこれほど猖獗を極めることもなかっただろう。

なお、この子供たちのあいだでは、やる気と愛着もないのに何かを学んだり成し遂げたりしてはならないということが決まっていた。その意図は善いものに、その道はおだやかなものに思われた。しかし、それゆえに以来破れたズボンを穿いている天才たちをみかけることがとても多くなった。また、自分の力に対する敬意はほどほどにしておいて、古い上着のことにもっと気を配ったらもっといいことがあるだろうに、とはっきりいう者もあらわれた。

Stockem), Bernd. In: Neue Deutsche Biographie. Bd. 12. Berlin 1979, S. 187.

10) ［原注］つまり、「様式ニオイテハ優美ニ、遂行ニアタッテハ大胆ニ（suaviter in modo, et fortiter in re.）」ではなかったのである。

11) ［訳注］ルキアーノスの作品のなかに、ヘルメスとカロンが浮世を眺めながら対話を続けるというものがある。そこで、クロトン出身のミロンという運動選手が牡牛を担いで歩くところを見ながら、彼の死ぬ時のことを考えたカロンが「間もなく私らの笑いものになるんでしょうが――あいつが牛どころか、蚊もよう持ち上げかねる姿で、舟へ乗ってくるときにゃあ」という場面があり、このシーンを念頭に置いた記述であると思われる。ルキアーノス「カロオン」呉茂一訳、『神々の對話　他六篇』呉茂一・山田潤二訳、岩波書店、1953年、11-42頁所収、24-25頁参照。

王侯はそもそも、自分たちの役に立つひとびとだけに俸禄を支払うものである。もしもわれわれも王侯であったならばおなじことをしただろう。ドイツでは天才に年金が与えられることがめったにないのはそのためである。ただし踊り子たちや音楽家たちもわれわれの領主たちに負担をたくさんかけるものだから、そのために哲学者たちの学院全体でようやくカストラートたったひとり分の恩給においつくほどになるということはある。しかしそういうわけなのだからどの若い者もその孤独な状態からドイツを変革し、世界を作り変えようと望むのではなく、世界に出てみてまずはちょっと周りを見渡し、それから差し当たって変革の範囲は自分だけにしていたほうがよかったのだ。

孤独はおそらく幾分不利になることを学者たちにももたらすであろう。しかし、学者といっても、ひとによってきわめて違った学者を思い浮かべてしまうはずだ。あまりにも違っている。たとえば動物の種族で考えると象と鶏、もしくは鷲とヒキガエルほども違うだろう。

多くの学者たちはまったくひとりで生活しているか、もしくはわずかな人間との間でしか生活していない。そして、自分の研究室の外に出るとなにもできない者となってしまうのである。彼らの状況は幾分か修道院のような様相を呈している。だから、彼らの全体的な性質にもときおり修道僧の流儀が幾分か混ざるのである。わたしのいうことを信じたくないかもしれないが、まったく確実であると述べたいのは、ひとびとがドイツでは、教壇であろうと、とても有名な街であろうと、学者たちに切迫して熱心に以下のようにお願いしているということがある。ぜひとも学者さんにいつも見られる欠点に陥らないようにしていただきたい、すなわち非社交性、人間嫌い、自分の領域外のことや自分たちの仕事に属さないことならなんでも軽んじるのはやめていただきたい、尊大な態度をとるのも、支配したがるのもやめていただきたい、弱い者、もの知らぬ者、迷っている者を愛情をもって支えてやっていただきたい、彼らを恥ずかしめるのではなく、教えてやっていただきたい、全てを決めつけるのをやめていただきたい、特に、理由もなく決めつけるのはやめていただきたい。どんなひとを相手にしてもそのひとの理解力にまで下りてきてほしい、ちょっとした反論を受けたらどんなものでもおおらかに聞いてやっていただきたい、学識のな

い者からでも、あなたがひとを教えているときと同じくらい喜んで学んでやっていただきたい。そして、お願いですから他のひとびとの到達した認識が、自分たちには慣れないものでも軽んじないでいただきたい、他のひとびとの長所が自分たちにはなじまなくても軽んじないでいただきたい、他のひとびとのあらゆる有益な活動を軽んじないでいただきたい、と。

こうしたお説教がどれほど効を奏しているのかは、わたしの耳にまでは届いていない。しかし、死んだ者及び生きている者とうまく付き合っていないことが、しばしば学者連中を、彼ら自身の目にとって、大いなる重要性があるように見せてしまっているというのは確かであろう。そのために、今度は他人の目から見ると、学外ではきわめてちょっとした内容しかない人間になることがしばしばあるのだ。多くの学者は、自分の学校の一角にいるのに慣れてしまって常に自分ひとりで話す声しか聴いていないので、われもしゃべろうとするひとびとが自分の隣にいるのを見ると驚いてしまうのである。彼らは交流が少ないので、自分を過信する感情が彼らを襲うこともあるだろう。過信の度合いが強いために、もっと人数の多いひととの交流をするときに、この感情を和らげたり隠したりする能力を完全に失う学者が少なくない。本に読みふけってひとのことを忘れ切ってしまうために、実際にはどんなひとの道徳的感情も害することがある。そして、粗野な学生たちの数人や、例えば最底辺の物乞いのごとき憐れむべき連中としか恒常的な交流がなく、そういう連中とのあいだでは知恵のある人間とされているが、実際に世間に出てみるとなんの知恵も持たないことも多い。

何日もプラトンと付き合うことができていたのに、それがプラトンであるとわからない。ある異邦の者がこの偉大なる哲学者に会おうと長い旅をしたことがあった。ひとがこの旅人に、質朴かつ融通の利くあの人物、あなたが名前も尋ねなかったあの人物がプラトンですよ、と伝えたときに、この旅人は何と驚いたことか。その人物とは、旅人は他のひとよりも注目することもないままに、有象無象が入り乱れた社交の場で話していたのだから。こんなわけで、プラトンが孤独にむしばまれなかったことと同様、我らの時代のふたりの偉大なドイツ人哲学者も孤独にむしばまれていなかった。すなわち高貴なるメンデルスゾーン[12]と、愛すべきガルヴェ[13]である。

自分で構えた売店にいて、そこの品物を欲しがらない連中にたいして口を歪めて見せる、そんな教授がいたら誰が彼を笑わないことがあろうか！しかし、人間の分別をもったひとびとならみんな知っていることだが、教授というものは、自分ほどよい問屋を押さえているやつは他にないと思い込んでいることで、その教授の売店の方では見つけることのできない品物でもふんだんに仕入れることができているのだ。

人間がかくも脆弱でろくな教育も受けていないと、孤独のために、そして寝間着を着たままの生活のために、そのような愚かな振る舞いに陥るのである。だから学者の全精神もまた、学校の片隅で誰とも付き合いがないか、あっても劣悪な人間とのみの交流ということになると、あらゆる点で近視眼的な視点を持つことになり、しばしば多くの弱点と矮小さもついてくる。しかしまた、そんな精神だけが思い込んでいるのだ。大学の外では生きていけない[14]、もしくはろくな生き方は絶対にありえない[15]、と。

---

12) ［訳注］ベルリン啓蒙主義を代表する哲学者、モーゼス・メンデルスゾーン（1729-1786）のこと。彼は、人間が他人と共生する際に、考え方・感じ方が異なるのは避けがたいとして、「寛容」をもって違う思想をもつものを尊重することを望んだ。Vgl. Segreff, Klaus-Werner: Mendelssohn, Moses. In: Neue Deutsche Biographie. Bd. 17. Berlin 1994, S. 46-49.

13) ［訳注］後期啓蒙主義の哲学者クリスティアン・ガルヴェ（1742-1798）のこと。ほとんど一生かけて、個人と社会の相互作用についての問題に取り組んだ。ファーガソンやバークなどの英国の著作および古代の古典の翻訳の業績でも知られる。さらに、フリードリヒ大王の依頼を受けてキケローの『義務について』を訳し、注釈した。Vgl. Wölfel, Kurt: Garve, Christian. In: Neue Deutsche Biographie. Bd. 6. Berlin 1964, S. 77 f.

14) ［原注］ある有名なドイツの教授はよくこう口にした。「学外ノ生、生ナラズ（vita extra academias non est vita.）」と。

15) ［原注］教授たちがときおり、他の人間のしない、もしくはすることがないであろう生き方の例を示しているのは疑う余地のないことである。さるドイツの大君侯が、所属大学では偉大な社交家で通っているドイツ人教授に、金のかぎ煙草入れを贈り、栄誉ある証書を贈った。教授は、片手に証書、もう一方にかぎ煙草入れを持った自分の姿を画家に描かせて、それを領主に送った。わたしはその領主の部屋で、片隅にかけてあるこの肖像画を見た。そしてすぐに、それがあの教授だとわかったのである。

粗野な若い馬鹿者たちを崇拝したことの避けがたい結末としてあらわれる無作法について学者が抱える罪を許してやることもやぶさかではない。寛容さは例外なくどんな人間にも必要だ。そうした学者に対して寛容を持たないことがあろうか？　例えば大学の外では誰も、教壇でいっている冗談を笑ってくれなくてひどくしょんぼりしている様子を見たときなどだ。

教壇での冗談は、孤立したごくひと握りの連中のあいだでしか通用しない。そうしたひとびとは大学特有の観念やものの考え方[16]の領域を出ず

---

16) ［原注］「大学特有の観念やものの考え方が、こころ構えをするうえで重大であることは明らかだ。他方、多くの高貴なる学生の精神がその教師が築いた柵や枠に押し込まれてしまうと、知識の増進に対しては妨げとなってしまう。神学、法律学、医学、哲学などなどが、古今のさまざまな手引書に忠実にひとりの同じ教師によって話を聞く数百の学生の前で講じられる、こんな一律の形式をとっていて学問の発展に対応できるとでもいうのだろうか？　生贄を捧げる神官の提げ香炉がいつでも同じように、学校や大学にもいつでも同じ教壇がある。しかも香炉にしても、説教壇の上でも、まがい物の乳香が煙っていることはしょっちゅうである。しかしながら、ほんのひとにぎりの人間しか自分で考えることができるまでに到達しないのだから、この場面の舞台裏がどんな様相を呈しているかを知っている観察者にしてみれば、精神なき亡霊の一隊が学知という靄を身にまとって登場する情景は、そう不快なものではない。少なくとも骸骨むき出しの人間を見せられることはないのだから。社会生活において、靄と昼間の日差し、そして雲の柱と炎の柱は、ほとんど同一のもののようであるようだ。ひとびとは、そのどちらにもついてゆくのだから。」――おお、このようにいったのは――ある教授である！ ドイツにおいて、その年にもっとも簡潔にもっとも大胆で有益な真実を述べた者に賞が与えられるならば、わたしは 1783 年度の賞を、そうして大学や、特に大学が社会生活にあたえる影響について考察する頭脳と勇気を持つその人物に与えるだろう。この部分は、ゲッティンゲンの哲学教授ヒスマン氏による『ライプニッツ男爵伝試論』［訳注：書誌情報は以下のとおり。Hißmann, Michael: Versuch über das Leben des Freyherrn von Leibnitz. Münster 1782.］の 13 ページに見られる。［訳注：出エジプト記第 13 章 21 から 22 節に、「そしてヤハウェは、彼らの前を歩み続けた。昼は雲の柱をもって、道で彼らを導くため、そして夜は火の柱をもって、彼らを照らすために」とある。「雲の柱と火の柱」は、民数記、申命記、ネヘミヤ記、詩篇にも登場する。『旧約聖書Ⅰ　律法　創世記　出エジプト記　レビ記　民数記　申命記』旧約聖書翻訳委員会、岩波書

に永遠にうろうろしていて、それ以上の世間のことは見ないで来て、何も知ろうとしない。彼らは今世紀の啓蒙に興味を示さない。それは大学街の市壁外に住む市民が、大学随一の教授たちの頭のなかにあるあらゆる人間の学知の膨大な蓄積に興味を示さないのと同様である。

社交界の方もまた学者に多くを要求しすぎるらしく、そのために、そうでなくても学者たちをしばしば不幸に陥れることのある、ひとに気に入られたいという彼らの欲は押しつぶされてしまう。真理でもあり、そこからは叡智が垣間見えもすることばだが、こういわれてきた。ほとんどが孤独な生活を送り、もしくは送ることを余儀なくされていて、さらに自由な精神をもたない、そうした学者たちには、より上流の社会で生きていて、あらゆる社交界の娯楽や催しに精を出すひとびとに見られるような、快活さや、上品な立ち居振る舞いや、世事に対する関心は望むべくもない、と。だから、スウェーデン女王クリスティーナ[17]の宮廷でマイボンとノーデ[18]が困り果てているさまが笑われたことは、実に残酷な話だったといえる。というのも、女王は宮廷中のひとが集まる前で公然と、古代の舞踏術につ

店、2004 年、186-187 頁参照。］

17) ［訳注］クリスティーナ（1626-1689）はスウェーデンの女王。学問・芸術を好んだことで知られる一方で、その趣味を追求したり宮廷を拡大したりしたことによって国の財政を危うくした。1654 年に王位を捨てて以降はイタリアでサロンを主宰した。百瀬宏他編『新版　世界各国史　21　北欧史』山川出版社、1998 年、148-149 頁および付録 6 頁参照。

18) ［訳注］マルクス･マイボン（1630-1711）は、スウェーデン女王クリスティーナによって宮廷に招聘されていた。彼には古代の音楽についての著作があり、女王の御前のコンサートでギリシアのアリアを歌わなければならなかった。このとき、フランス人の学者ガブリエル・ノーデ（1600-1653）はギリシアの舞踏を披露しなければならなかった。Vgl. Minor: a.a.O., S. 401. ノーデの生涯に関しては次の文献も参照のこと。Vgl. Zedler, Johann Heinrich: Grosses vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschafften und Künste, [...]. Bd. 23. Halle u. Leipzig 1740. Art. „Naude, oder Naudäus (Gabriel)“, Sp. 1269-1273. なお、このマイボンとノーデの逸話は 19 世紀初めごろにも有名だったようで、以下の文献にも記載がある。Gräffer, Franz: Maibom als griechischer Sänger. In: Historische Unterhaltungen. Kleine Denkwürdigkeiten, Aufschlüsse, Persönlichkeiten, Anecdoten, Notizen etc. aus der ältern und neuern Zeit- und Literargeschichte. Wien 1823, S. 97.

いて書いていたノーデには、すこし踊ってみるように、といい、古代の歌唱術について書いていたマイボンには、すこし歌ってみるように、といったのである。

また、パリのある貴婦人が大数学者ニコル[19]を曲線についての該博な知識があるからと食事に招待したときに、フランス人たちが彼のことを笑い者にしたのも残酷な話であった。善良なニコルは生涯でこれほどのご馳走にありついたことがなかった。彼は座を辞すときに、その貴婦人に限りない感謝を伝え、「あなたの美しい小さな目には永遠の讃嘆を禁じ得ない」、とつけくわえた。大数学者ともあろうものが、ばかげたお世辞だったな、と友人のひとりが帰りしなの階段のところでいった。では失敗をとりかえさなくては、と大ニコルは答えた。友人が彼を止める間もあらばこそ、その貴婦人のところに戻って、慇懃に赦しを請うた。そして美しい貴婦人というものは自分になにか小さいところがあるとひとに思われているのには耐えられまいと考え、こう誓言したのである。「かように麗しく大きな目と、かように麗しく大きな鼻と、かように麗しく大きな口と、かように麗しく大きな足は見たことがありません」と。

このことからわかるのは、ちょっとした欠点が学者にとって悪くはたらくのは、大きいものを小さいと見ようとする目を持つとき、彼らの仲間内で通用する観点から全てを見るとき、もしくは彼らが勝手に作った善い生き方というきわめて恣意的な型に従って全てを見ている目をもっているときだけである、ということだ。

もっとも、書斎学者が自らの住んでいる国から、目新しくなじみのない風習の国に移って社交の場に出ることもある。[20] 多くの学者は過度に謙虚

---

19) ［訳注］ニコル・オレーム（1320 頃 -1382）を指すと思われる。『岩波哲学・思想辞典』において、オレームは「14 世紀のパリ大学が生み出した最も独創的な哲学者・数学者・神学者」とされている。著書として『比の比について』『性質と運動の布置について』（ともに 1350 年代）など。高橋憲一「オレーム」『岩波哲学・思想事典』廣松渉他編、岩波書店、1998 年、195-196 頁所収。

20) ［訳注］ツィンマーマン自身、ブルックからハノーファーに移ったことがある。ハノーファーでの生活や社交の様子については彼が友人に宛てた手紙から垣間見ることができる。Vgl. Bodemann, Eduard: Johann Georg Zimmermann. Sein

で、社交の場に姿を現わすことなど望むべくもない、と信じているのだ。だから、そういうひとはむしろそっぽを向いてパイプをくゆらせていることを好むのである。おごった態度でよく知りもせずにあらゆる学問を軽蔑する者の集まりで、もし学者がしゃべり出そうものなら、彼らは一斉に簡単にその場を引きはらってしまう、そういう場で自分の話を聞いてもらおうとするのは難しいことだと感じている学者も少なくない。自分が世間にとってよそ者であるのと同じように、世間は自分になじまぬものであると感じる学者もいる。自分の精神の力はもうすべて自分の著作に注ぎつくしてしまったので、いざ社交の場に出てもすべて絞りつくしたレモン同様、一滴も出ないのだ、と簡単にあきらめてしまう者もある。煌々とした照明で照らされた社交の場では、ひとが思考することがいかに無価値で、そしてその喧騒のなかでことばが重要な意味を持ったりするが歓迎される、という状況はほとんどないことをじきに察する学者も少なからずいる。自分らしからぬ・自分がなれない姿に無理やり収まっても、頭が空っぽの連中には自分では太刀打ちできないと見てとる学者も少なくないのである。だから学者たちは自分が笑い者になってしまう状況では退席したがる。かくして行儀よく退席すると、全員が鼻に皺を寄せて軽蔑するのである。

ひとびとのために書き、ひとびとに影響を与えるだけの能力、もしくは使命を持つ多くの学者は、それゆえにひとを避けるのだが、それは間違っている。自分の授業の出典となっている書物だけでは、人間知や世間の経験のためには不十分なものになるからだ。少なくともそうした出典は、観察する精神として一般に少しずつ認められるようになってきた審美力を与えることはない。ところが、まさにその審美力によって、人間を知った喜びが結局のところ少なかったとしても人間を研究しようという意欲を得るものなのだ。こうした階級の偉大な文筆家たちは世間づきあいによって、さらに人間に最も善く、また最も悪く働きかけるものを自ら経験することで自らを作り上げてきたのである。いかなる文筆家も、あるべきふるまい

Leben und bisher ungedruckte Briefe an denselben von Bodmer, Breitinger, Geßner, Sulzer, Moses Mendelssohn, Nicolai, der Karschin, Herder und G. Forster. Hannover 1878, S. 43-59.

を会得するには、ひとびととの交際にしくはないのである。というのも、人前では考えをはせるただけで赤面しそうな代物でも、自宅では平気で書きつらねているではないか！[21)]

---

21) ［原注］例えば下品（ゾティーゼ）な表現！――これはまさにわたしの場合である。わたしがこの本を書いていたおり、ときおりどこかで（当然不本意ながら）上流社会のひとびとと食事をしなければならなくなるということがたびたびあった。わたしは通例通り男女交互の列で、ふたりの美しいご婦人のあいだにすわった。しかし、ふたりに何をいったらいいのかわからず、そのふたりもわたしに何をいうべきかわかっていない、ということが起こり、その長い時間、常に恐ろしいほどの退屈がわたしを襲った。わたしはできるかぎり自分のたましいの死と闘いつづけなければならなかった。しかし、わたしは自分の手持ちのなかに、この責苦をいくぶんでも和らげるものはもはや持ってなかったので、頭のなかでこの本についての批評を始めた。「おまえはどう感じる」とわたしは自問した。「紳士淑女がいらして、そのなかでおまえは黙りこくって座っているが、その方々がお前が何を書いているか知っていたとしたらだ。そして、この個所と、この個所と、この個所と、この個所、この個所と、この個所とについて何といってくるだろう？」それから、わたしは自分自身のなかでこの本のときおり特に目立つところをすべて朗読し、紳士淑女の顔を見つめた。大胆で思い切った個所がくるといつでもこころの底から気分が良かった。下品な表現のところにくると、不快で、不安で、ふさぎこむような気持になった。つまり、おそらくわたしの性格には、真実を大胆に偽りなくいうところがあるのだろう。しかしまた、わたしが受けた教育といい交流の賜物であるのだが、わたしの性格とまったく相いれないのが、慎み深いひとが赤面させられたり、誰か美しい女性が驚愕することになったりしそうなことをいうことである。そのため、わたしはいい世間づきあいを通して、社交界で愚かなことを決していわないような人間になった。しかし、だからといってくだらないことを書かない、という域には残念ながらいまだ達していないのだ！　そういうわけでわたしがこの本を書いていたとき、あんなにたびたび戦慄と驚愕が淑女たちの社交の場でわたしを襲ったのだった。だから、そうした社交の場から抜けて帰宅し、この恐怖が続いているあいだに、数えきれないほどの浅薄な個所を消し去った。それらについては少なからぬ世なれたひとびとが、あなたの本のなかで最もすばらしい個所だ！　と言い兼ねない個所であった。結局しかし、わたしは以下のような鉄則を作り上げることになった。それはこの本全体で忠実に守られているものである。構成を考える際の炎のなかで、気まぐれか

世間との付き合いは、思考を試したり新しい考えを生み出したりするための汲み尽くせぬ泉である。世間づきあいをすることで精神には特徴がもたらされ、礼儀には柔軟さとしなやかさと力が与えられる。その力によってひとは一見不可能なことを可能にしたり、ひとのこころを引きつけたり、そしてひとの気持ちを納得させたりするのだ。なんとも多くの学者たちが孤独の暗黒にいてそこから人間を啓蒙してやろうとしてはいるが、どのようにして人間に影響を与えたものかを知らないのだ。彼らは目標とするものを引きつけようとしているつもりでも、みずから遠ざけてしまっている。彼らは常に的を狙うが、命中させることは決してないのである。そのことが善いことで、似つかわしいことである限りにおいては、有用かつ罪のない真実を示して公衆全体を可能であれば震撼せしめよ。しかしまた、芸術を好ましく、平和に、落ち着いて、甲斐甲斐しく、友人を遇するがごときに学びつつも、この激情の状態に置かれたことであなたを弾劾するものがいても、そのひとたちとも腕をとって歩くことも学ばなければならぬ。

孤独と寝間着生活は、しばしば特別よい生き方をしている学者たちと特段に有能な頭脳の持ち主にわからせるのだ。ソロモンがいみじくもいっているように、「歩くには足が速い必要はない。争うには強い必要はない。栄養をとるには巧みすぎる必要はない。好ましいひとだからといって、何

ら吐いたに過ぎない愚かなことばがひとつあることを見出したら、それを直ちに消し去るのだ。愚かなことばがわたしの素材といえるもので、なおかつ十分によく、完全に合目的的な理由からわたしの本にあることがわかれば、残しておく。こうした信条のもとでは、このようにいっても良心の呵責を感じない。それはかつて、ロンドンの威厳あるローレンス・スターンが大きな社交の場でいったことである。「たったひとつでも愚かなことばを筆からほとばしらせた作家は誰でも彼の自宅のドアの前に吊るしてやればよいのだ」と。しかし、残念にもひとりの女性がこう答えた。「スターンさん、それではあなたは間借りしていらっしゃるのね？」［訳注：ローレンス・スターン（1713-1768）は英国の作家。彼の『ヨーリックのセンチメンタル・ジャーニー』は、レッシングによって Empfindsame Reise という訳語を与えられ、18 世紀後半のドイツの文学・思想に多大なる影響を及ぼした。Vgl. Minor: a.a.O., S. 403; マックス・フォン・ベーン『ドイツ十八世紀の文化と社会』飯塚信雄他訳、三修社、1984 年、54-55 頁参照。］

ごとかをなしうるわけではない」ということを。[22)]

そうした学者たちが真実を認識することにほんとうにみずからの楽しみをひとたび見出せば、多くの実りが約束されている野に胸を熱くしながら身を投じることが普通のことになるだろう。そこから生じる、隔絶された生というのはあらゆる凡庸なよろこびにくらべて特に刺激を持つので、そうしたひとにとってそこから身をもぎ剥がそうとするのは難しいことである。社交の場に出たり、食事に呼ばれたり、おおやけの楽しみの場に出て行くと、このことはいろいろな状況や考察のための秘かなる犠牲となるのだ。そしてそうしたことどもは、彼の成功に真なる影響をなにも与えないのだ。こころや信条の一種の崇高さのために、そうした学者たちにとってはその他の点では、ひとが幸せと呼んでいることは極めてどうでもいいものになってしまう。彼らの高潔さは、彼らが競争者を遠ざけるために必要なので当然するはずのことや、幸せの道の上で前に出ることを妨げる。ひとは人間の直接的な欲求に負うている学問をすすめなくてはならない。自分がともに生活しているひとびとが怒り出すこともあるかもしれないが、自分の幸せを作らなければならないのだから。ただし反対に、少なからぬ国において、極めて偉大な学者が、もっとも鋭敏な感覚を持った哲学的で道徳的で政治的な思想家が、ひとにその孤独から活動的な生に呼び出されるまでは屋根裏部屋でわびしくしているということもある。

よくわたしはこのことについて考え込むのだ。この手のひとびとは上流社会で気に入られ、輝くためのあらゆる愛らしさと、備えうる限りの才能と、政治的な知識を得ているはずなのに、文筆で得たあらゆる名声をひとりぼっちの暗黒のなかで携えて、職務も前途もなく、予定だけあって実ることのない生活を閉じることになるのはどうしてだろう、と。

ただし、彼らの生きる国も多少関係している。功績があるにもかかわらずそうした哀れな境遇のひとびとをわたしはドイツでは知らない。ドイツ

---

22)［訳注］ルター訳の旧約聖書の『伝道の書』第 9 章 11 節より。1784 年刊行のものを参照した。Vgl. Die Bibel, oder die ganze Heilige Schrift des alten und neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers. 86. Auflage. Halle 1784, S. 660.

はいい本を 1 冊書いていれば、それによって少なからぬ大臣が認めてくれる国なのだ。有能で有用な頭脳の持ち主であることがわかるとすぐに、ドイツでは用いられることは確実である。しかし、そういった能力があってもスイスにおいては何の役にも立たない。都市貴族の特権に生まれついていなければ彼は市参事会員や郡代にならないことが、彼がまだゆりかごのなかでおしっこを漏らしているようなときから決まっている。もしくは、高貴だったり高貴でなかったり、愛想が良かったり強面だったり、物が分かったり盲目的だったり、賢かったり賢くなかったりするような幸福の分配者が幾千幾百といるが、栄誉を伴っていてもへつらいによるものであっても彼らからわずかばかりの職を得られなければ、能力など役に立たないのだ。特に政治的な思想家は、スイスにおいては援助される前に追い出されないように用心した方が良い。[23)]

しかし、ここまでいってきたことだけでは不十分である。わたしには、学識・哲学・孤独はともに作用してまったく別種の不愉快なものを作り出しているように思われる。このことがひょっとするとこの問い全体を解決するものかもしれない。医師に対してお世辞をいっているつもりで、あなたは哲学的医師[24)] だと述べることがよくある。その栄誉については感謝もしないひとが多かろう。もし将校に対して、あなたは哲学的将軍の素質をすべて備えているというお世辞をいったとしたら、将校はなんというだろう？

ここが勘所である。上流社会において、微妙で、ひとを困らせ、扱いづ

---

23) ［原注］チューリヒ共和国基本法に従えば、この共和国の国体について、外国の私人と通わされる通信はどんなものでも反逆罪に問われるとのこと。

24) ［訳注］「哲学的医師」はハレの医師エルンスト・プラートナーの著作などに見られる、18 世紀の人間学を論じる上で重要な語彙。この時代には人間をこころと体の統合と見て、心身の両面からアプローチする必要性が説かれた。そうした人間の探究を可能にする存在として要請されたのが、「哲学的医師」であった。ツィンマーマンも人間の全体像を把握する際にはこころと体の両面から迫る必要があると考えていた。斎藤太郎「ヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマンにおけるヒポコンドリーと政治」『藝文研究』第 81 号、2001 年、331(82)-353(60) 頁所収、334(79)-336(77) 頁参照。

らく、また危険でもある人生のあらゆる諸事情において、万人のためにあらゆることを述べたり、あらゆることを決定したりするための見通しをたてることは哲学ではない。その見通しをたてることとは狐疑逡巡することでもなければ、考えをゆっくりと展開していくことでもないし、疑いまどうことではない。肯定しながら否定することでも、否定しながら肯定することでもない。こうしたことには、最も偉大な哲学的思想家であっても孤独のなかではとても慣れっこになっている。すばやく、真っ直ぐに、あらゆる方面に流動的に、それでいて確固として大胆にと、何においてもそのようにことにあたらなくてはならない。常にすばやく、恐れず、そして勇敢でなければならないのだ。これは、わたしが知っている限りで、たしかにどんな哲学者も犯さないような数えきれないほどの誤りにつながる道ではある。しかし、上流社会で成功するための唯一の、最良の、そして最も確実な道なのだ。

人生におけるありとあらゆる状況ともつれあいのなかに存在する人間と交際することは、孤独な状態ではできないが、この道へ導いてくれる。だから本もまた、ベーコン[25]のいうように、本の使い方を教えてくれないのだ。[26] あなたが人間を正確に知ろうとするならば、人間がどう行動しているかを見て、みずからその仕事に巻き込まれ、ちょっとした世知を得るのに恐ろしく高い代償を払わなくてはならない。しかし、哲学者が世間

---

25) ［訳注］イギリスの哲学者で政治家のフランシス･ベーコン（1561-1626）のこと。Vgl. Minor: a.a.O., S. 405.

26) ［原注］その哲学を学ぶために全ドイツからひとが旅するに値するゲッティンゲンのヒスマン教授は、教授特有の偏見は一切ない教授であり、彼は『ライプニッツ男爵伝試論』のなかで述べている。「研究室の四方の壁は世間の果てをなすものではない。そして、あらゆる本のなかに、偉大な人物たちが考えてきたことがあるわけではない。多くの注釈、研究や、ある状況下での極めて重大なことは、本には決して書かれていない。だから、研究室のなかでの自己形成は、読書および熟考に始まる。自己形成が継続され完成されるのは、人間との交際、そして彼らの思考、偏見、知性や愚かさを知ることによってである。そのようにしてまずソクラテスは、詩人と賢人たちの注目に値する書物をすべて読んだあとで、アスパシアから弁論術を、そしてディオティマから愛の技術を学んだのだ」［訳注 : Vgl. Hißmann: a.a.O., S. 17f.］

づきあいのなかでよい雰囲気だけを得さえすればもうそれで儲けものである。そうした気分は孤独な状況にあっては簡単に失われるが、社交の場においては、おどけ者にも愛され、ならず者からも尊敬を勝ちとるものである。だが、哲学者が世間において、世間がその弱さや誤りによって彼に与える教え以外に得るものはないのだとしても、もうそのことによって世間が彼にもたらす不快はあがなわれるのだ。

しかし、哲学者[27]に益することはほかにもある。哲学者は人間を我慢することを学び、人間たちは彼を我慢することを学ぶのだ。哲学者が、ソクラテスやヴィーラントのように、哲学が持つ柔らかで心地よい部分だけを使うときそして、難しくひとの気に入らない部分は排除するとき、哲学者は哲学を社交的なものにすることができる。普段、哲学は孤独で厳しいものであるのに、だ。つまり、彼は哲学から、ひとを脅かして追い払うための仮面をはぎ取り、その本来の美しさを見せるのである。ある卓越したドイツの著述家がフランクリンの生涯について書いた名人芸といえる文章のなかでいっていることだが、フランクリンの語り口は、学識らしい見せかけがまったくなく、どこにも概説書めいた様子がないそうである。すべてが独立した所見であり、その所見を持つに至ったきっかけもすべて付してある。これらはわれわれに好ましく語りかけてきており、短い命題も、小論文も、友人や女性に宛てたちょっとした手紙もそのように語りかけるという。ひとびとはそれに興味を持ち、飽きることがなく、その提示の仕方やその対象自体も変化に富んでいることを見出すそうだ。世間知に長けた人間のこの繊細な精神と、非衒学的な賢人の健全な感覚はフランクリン

---

27) ［訳注］この「哲学者」といういいまわしには注意を要する。歴史家ロバート・ダーントンのエッセイによれば、啓蒙主義の時代にフランス語で「フィロゾフ（philosophes）」といえば、「文筆家（Literaten）」であり、われわれが今日、「知識人（Intellektuellen）」として認識するようなひとびとの類型のことであるという。ここで後続する文を見ても、「ソクラテスからヴィーラント」が哲学者ということばで括られており、「哲学者」ということばをきいたときにわれわれが一般的に抱くイメージよりも、もっと広いものを指していると思われる。Vgl. Darnton, Robert: George Washingtons falsche Zähne oder noch einmal: Was ist Aufklärung? Übersetzt v. Henning Ritter. München 1996, S. 5f.

の著作のいたるところに息づいているという。

監察官カトー[28]は真面目な人間であったが、衒学家ではなかった。彼の寛容さが彼をそれどころか好ましい人間にしていた。彼は、賢者が愚か者の教えになることよりも、愚か者が賢者にとっての教えとして貢献することの方が多いと考えていた。というのも周知のごとく、愚か者が賢人の教えを避けるのと同様、賢人は愚か者の例にならおうとはしないからである。マルクス・アウレーリウス帝がいうには、高慢な者や痴れ者どもは考えずに話すものだ。この種の輩を我慢することを余に教えてくれたのは哲学者セクストスだった、と。[29]

こうした愛すべき寛容さは、最上の啓蒙された頭脳とあらゆる啓蒙と縁遠い人間を結びつける。そうした頭脳の持ち主は孤独な状態にあるときにその知識の種を撒いておいて、世間においてその実を収穫するのである。孤独な状態にあっては彼の知識欲の前では大きすぎるというものはなく、世間においては人間のこころのなかで彼にとってどんなひだも小さすぎるということはない。こうした人物は孤独な状態では無作法なものだが、世間づきあいするなかでは、おだやかで丁重になる。すべての人間に、すべての身分に対して好意的な人間となるのだ。本当に礼儀正しい者は自分自身を誰かに対してほんの少しでも優れているなどということは決してな

---

28)［訳注］大カトー（前 234- 前 149）のこと。ローマの政治家にして著述家。ここの記述とは対照的に、ギリシア文化流入に反対する姿勢をとるという、どちらかといえば閉鎖的な態度をとっていたことで知られるが、実は多岐にわたるギリシアの文献に触れていたこともわかっている。なお、大カトーはキケローの『老年について』の主要人物である。大カトーの生涯については、以下を参照。中務哲郎「『大カトー・老年について』解説」『キケロー選集 9』中務哲郎･高橋宏幸訳、岩波書店、1999 年、353-368 頁所収、ここは 353-358 頁。

29)［訳注］マルクス・アウレーリウス・アントーニーヌス（121-180）はローマの皇帝。その最も有名な著書『自省録』は、ギリシア語で書かれた。マルクス・アウレーリウス『自省録』神谷美恵子訳、岩波書店、2007 年、3-5 頁の「訳者序」および 303-324 頁の「訳者解説」参照。その『自省録』のなかで、セクストスから教わったものとして「無知な者および道理をわきまえぬ者にたいする忍耐」を挙げている。セクストスは、カイロネイア出身のストア派哲学者である。同上、13-14 頁および巻末注 247 頁参照。

い。何かの音頭をとるようなこともなければ、何かを講釈することもない！　ソクラテスがその振る舞い方すべてにおいてあれほどまでに愛すべきところがなかったならば、彼が天からの知恵を呼び寄せても無駄であったろう。ひとが人間観察者を恐れるのをやめれば、人間観察者は愛され続けるであろう。すべては愛のため、といったのはゲーテ[30]だが、ゲーテに会ったことのある者は、彼がいかに優美さによってその精神の力を、親切さによってその孤独な時間の真面目さを隠しているかを目の当たりにすることになる。

人間に誠実に近づき、ひとを信頼してともに生きるときには、常に愛を見出すものである。われわれが助言や手助けや助力をほかの人間に求めない状態は人間ならばあり得ない。しかし、ひとに常に気を使わせずにはいられず、ひとには気を使うことのない、そんな人間がどのようにして愛を受けること期待することができようか。そうした人間は自分の口から発されるどんなことばにも恐れをなす。自分の胸から押し出たどんな感覚にも、彼のこころの状態がどうかを漏らしてしまうどんな顔つきや身振りにもだ。そういうひとはそれゆえに、どの人間にも頼らず、常に隠者のように不機嫌にものを見ながら、常に黙って、頑固でいて、閉じこもっていて、常に殻をかぶって用心して、どんな人間も信じないものだが、それでもいい人間がいるところならば愛のために愛を見つけるであろう。[31]

---

30) ［訳注］「すべては愛のため（Alles um Liebe）」というフレーズは、結末が書きかえられた『シュテラ』第5幕で見られるもの（Vgl. Goethe, Johann Wolfgang: Goethe's Werke. Bd. 6. Stuttgart u. Tübingen 1816, S. 377. ここではコッタ社の版を参照）が最も有名であるようだ。しかし、結末が変更された後の『シュテラ』が発表されたのは19世紀に入ってのことであるので（『ゲーテ全集』第4巻、新装普及版、潮出版社、2003年、277頁および巻末の渡辺健による『シュテラ』の解説の445-446頁参照）、1784年出版の『孤独について』にでているのはおかしい。『シュテラ』以外のゲーテ作品でこのことばが使われたことがあるか、もしくはツィンマーマンがゲーテと個人的に交友するなかでゲーテがよく口にしていたのかもしれない。

31) ［原注］我らの若い文筆家たちの著作を読んでみれば、彼らが控えめだといって嘆くにはあたらない。しかし、優秀な頭脳の持ち主や偉大な啓蒙のひとびとが我らが若い文筆家たちのあいだにもいるのだ。文筆家たちは交際するな

真の・持続する喜びの誘因は常に、したいときにすぐに自分の気持を他人に打ち明ける技能において存在している。誰かといただけで当惑する必要はないし、またわれわれといて当惑しなければならないひともいない。世間のあらゆる称賛、あらゆる惨めな栄誉、あらゆる物乞いじみた恩恵、新聞・雑誌のなかにあるあらゆる仰々しい祭り上げは、実際のところ、究極的には以下のような考えひとつに若かないのである。「この哀れなる者に今、わたしは自分への信頼を引き起こしたぞ」、「この沈んでいる者を今、わたしは慰めたぞ」、「この臆病者を、なんとなんと、わたしは盛り上げて、再び勇気を取り戻させたぞ」などだ。しかし、他者に愛される技能を持っていないと、こうしたことはすべてできないのである。そしてこうした技能を、学者は簡単に孤独の状態で失うのである。精神とこころは、そうしたこころばえや諸力によって盛り立てられる。高く称賛される行為であっても、枯渇して実りのない学問新しい考え方を云々することや、永遠に話されるのはラテン語だけだろうと、分厚い本で示すドイツ人教授のあの傲然としたやかましい望みよりもずっと有効である。

実際に孤独のなかで精神を高揚させてくれる気持ちをもって、人間のあいだを歩き回る者ことを常とする者がいたら、人間のそばにいても愛を得ることは少ないだろう。自分自身を信用する気を与えるのはそうした気持ちである。そうした気持ちでひとは勇敢になれるが、高慢にもなるのだ。

自分の話すことを聞き、ほめてくれて、決して反論しないひとびとだけを愛する者に、自分が愛される価値はない。ああ、なんと多くの学者と有名な文筆家が人間愛があると吹聴していることか。そうした人間が好意で

かでその哲学を人間らしいものにしようとはせず、自分たちの知恵の泉をひとびとが飲むことを認めようとしない。わたしには思われるのだが、こうしたことを謙虚さととらえるものはいまい？　自分の名声の力のみならず、人間の愛情や好意を持たれることによって自分の幸福を成そうとする者は、こうした振る舞いで間違った道に立つことになる。常に沈黙していたあの天才たちが数年のうちになしたものよりも、同い年でありながら比べものにならないほどに劣るような、頭がいい程度のひとびとでも、より人懐っこく、より腹蔵なく、より天真爛漫であるために、一日のうちにより多くの人心を掴むからだ。

燃えているのもひとから何かを要求されるまでのことだ。要求を受けた途端に彼と一緒になって熱狂しない友人ならば、そのひとが誠意ある者であっても冷たく接し、彼らが危機にあっても放っておくのである。あの哀れなる学識ある阿呆どもは、常に鞄に自分の著作か、ひとが自分を褒めてくれた文句の手紙を入れていて、そして諸君にこうした代物を読み聞かせ、わずかばかりの諸君の称賛を得ようとする。そして、諸君がその読み聞かせの場であくびをしたら、諸君を呪い、常にその恐ろしい手紙鞄を携えて家から家へと渡り歩くだろう。そんなやつらがやってきたらひとは驚き、そして去ってしまえば喜ぶだろう。だから、こうした屋内生活における野心は捨ててしまうのがいいのだ。その野心のめざしているものは子供じみた虚栄心を満たすことの外にない。そしてその導かれる先はほかでもない、自らの望みの頂点にいる諸君をうらやむすべての者が常に諸君に害をなす態勢を整えていて、諸君を称賛こそすれ、誰も諸君を愛することのない状態である。

ガウン姿で書斎に閉じこもる学者生活にも、しかしながらその高貴で崇高な面がある。学識があっても妬み屋だと、誹謗し、からかい、ちくちくといいたて、こき下ろし、苦しむことになるのだ。ひとりぼっちで、卑しく、沈んだ気持で。だが、幸福にも名誉に満ちていて、あらゆる人間から称賛されるのが、ひとを一切妬むことのない教授の生活である。世間はその教授によって啓蒙され、世間は彼を愛し、また崇拝する。教授の方は、自分の弟子以外の人間が眼に入らない人物ではあるのだが。彼はその崇高なる落着き、その内なる偉大さ、その分別のある自己省察のおかげで、ひとに認めてもらうためにおふざけや冗談も必要としない。彼のこころは決して鈍ることがない。その思考力は決して疲れない。彼にとってはどんな精神の活動であっても大きすぎるということはないのである。常に瞑想し、常にものを書き、常にものを読むことができる。彼は常になんにでも喜びを見いだすのである。彼は自分の大学の存在を、あらゆる人間知や、人類の啓蒙されたひとびとのうちで流通しているあらゆる知識の集積・資本の、大いなる貯蔵庫であると見なしているのだ。彼はそれゆえに常に熱を失わないままでいて、常に最も高貴なる興奮のなかにいて、決して飽かず、決して倦まず、決して病まない。彼の著作は穏やかに容易くそのペンから流

れ出る。源泉から流れる小川さながらである。汲み尽くせぬ想像力を持っていて、その思考への衝動はどんな種類の不快にも屈服することがない。決して嫌気や不満、そして精神に対する肉体の恐るべき優越と闘う必要がない。彼は自分自身のなかで満足してしまっていて、人付き合いのあらゆる喜びをあきらめてしまうことができる。自分自身を味わって、常に満足して生きているのである。自分の仕事が気に喰わない、などと彼は決していう必要はない。仕事の進みが遅かったとしても、決してもどかしく思うことがない。その知識・思考の蓄えはますます増大し、新たな考え方に姿を変え、決して組み尽くされることがない。彼はまとめたいものは何でもまとめて何でも仕上げるに足るだけの精神と根気を持っている。それでいて、本を1冊書こうという人間にならば、つまり、教え導くおおやけの立場にあると考えている人間にならだれにでもつばを吐きかけてやる権利があると信じている手合いについては、人生において彼は知る由がないのである。

そうした幸せな人間たちはわたしの近くにもいる。そういうひとびとはドイツに多くいて、その例が示すのは、閉じこもった学者生活について一般的なことはなにもいってはならない、ということだ。そうした孤独は、いくつかの愚かしいことや恐ろしいことを引き起こすかもしれない。孤独は、なにか高貴な情念に刺激を受けることもなく、もしくは、たったひとつのことについて常に持続的に昼も夜もなく不断に熟考していることで、孤独の状態で過度に働く人間に害を与えることもたびたびである。孤独は常に礼儀作法の学校であるというわけではなく、ときおり、学者や教授をひとびとのあいだにおいて、ある家では鷹のごとく飛び回るが、他では虫けらのように這いずるような仲間外れにしてしまうこともあるだろう。

しかしこれは、孤独に対してのわたしの批難というわけではない。想像力や情念に関する遙かに重大な欠点については、特に詳細で正確な調査の価値はあろう。それらは結局のところ、修道院や隠者の生活が神に仕えることになるか、悪魔に仕えることになるのか、知恵の根源に到達するか、もしくは単に神秘的な空気のなかにはいりこんでしまうのか、という大いなる問いの解決に貢献するからだ。

【定本について】

Ueber die Einsamkeit の全 4 巻は 18 世紀のうちに 3 種類の海賊版が刊行されている。3 種類の海賊版は 1784 年から 1785 年にかけてカールスルーエで、1785 年にフランクフルト／ライプツィヒで、また 1785 年から 1786 年にかけてトロッパウ（オパヴァ）でそれぞれ刊行されている。（Vgl. Goedeke, Karl u. Goetze, Edmund: Grundrisz zur Geschichte der deutschen Dichtung aus den Quellen. Bd. 4. 1. Abtlg. 3. neu bearbeitete Auflage. Dresden 1916, S. 480-484, hier S. 482.）

本抄訳で使った底本の書誌情報は次のとおり。

Zimmermann, Johann Georg: Ueber die Einsamkeit. 2. Theil. Leipzig: Weidemanns Erben und Reich 1784, S. 1-43.

この版には、第 5 章の冒頭に挿絵があるものとないものとがあり、両者には頁数に異同がある。今回の翻訳および訳注の作成にあたって使用したのは、第 5 章冒頭に挿絵があるものである。また、訳注で Ueber die Einsamkeit の第 1 巻を挙げた場合も、底本に採用した第 2 巻と同じ版元のものを使用した。第 1 巻においても第 1 章冒頭に挿絵があるものとないものとがあり、第 2 巻と同様に両者には頁数に異同がある。こちらも第 1 章冒頭に挿絵がある方を採用している。

ツィンマーマン『孤独について』解説

中村大介

本稿は、18 世紀の医師・著述家ヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマンによる『孤独について（Ueber die Einsamkeit）』（1784-1785）の抄訳である。原典は 4 巻からなる浩瀚な書物であり、とてもその全体を訳すことはできないため、今回はそのうちの 2 巻の冒頭にある、第 5 章「孤独の持ついくつかの欠点」を翻訳した。ツィンマーマンの『孤独について』は 18 世紀には非常によく読まれ、果てはロシアのエカチェリーナ 2 世にも称賛を受けるほどであった。[1] ツィンマーマンは 1728 年にスイスのブルックに生まれた。同郷の大学者アルブレヒト・ハラーの指導のもとゲッティンゲン大学で学業を修める。その後、一時スイスに戻ったりもしながら、出世欲の強い彼は社会的地位を得るために著述活動を開始する。彼がドイツの論壇でその存在感を増していくにつれ、彼の名声はどんどん高まっていった。そして、『孤独について』の成功の後には死期迫るフリードリヒ 2 世の治療のためポツダムに呼ばれることとなる。80 年代半ばまでは啓蒙主義者として尊敬をあつめていたツィンマーマンだったが、『フリードリヒ大王、およびわたしと晩年の彼との対話』を 1788 年に発表したのち、彼は突如として啓蒙主義に敵対的な立場をとり、政治的な色彩を帯びた活動を展開していくことになる。[2] ツィンマーマンが 1795 年に没すると、18 世紀のうちにはすでに彼の友人であるフランス語圏スイスの医師サミュエル・ティソーによるツィンマーマンの伝記の 2 種のドイツ語翻訳版が刊行され

---

1) 斎藤太郎「ヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマンにおけるヒポコンドリーと政治」『藝文研究』第 81 号、2001 年、331(82)-353(60) 頁所収、340(73)-343(70) 頁参照。本解説におけるツィンマーマンについての伝記的記述は、多くを本論文に負うている。さらに、斎藤太郎先生には今回の翻訳および訳注の作成に際して多大なるお力添えをいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

2) ここまでのツィンマーマンの経歴の記述については、同上、特に 333(80)-347(66) 頁を参照。

ている。[3] このことからも彼が当時いかに重要な人物であったかがわかる。

本抄訳からは、彼が『孤独について』執筆時には論壇においてどのような立場をとっていたかも読み取れる。まずは、ヤーコプ・ヘルマン・オーベライトに対するあてこすり・非難が見られるところ（翻訳 61 頁など）が注目に値する。さらに、後にツィンマーマンが敵対する立場をとるベルリン啓蒙主義の代表者モーゼス・メンデルスゾーン[4] に対しても、ここでは極めて好意的であり（翻訳 68 頁）、「反啓蒙主義的扇動をおこなう『政治的著述家』」[5] に転じる前のツィンマーマンの姿が見えてくる。

18 世紀の啓蒙主義を語るうえでは、社交が重要視されていた事実を外すことはできない。啓蒙主義の時代には、社交そのものについて議論されてきた。[6] 18 世紀の半ばからは、国家や宮廷などとは異なる形の、クラブ、読書協会、学術協会などといった新しい社交の形が生まれた。そうした社交のなかにはフリーメーソンに代表されるような秘密結社も含まれる。[7] 18 世紀から 19 世紀にかけての時期には芸術家とその作品にとっても社交は意味を持ち始めた。[8] そして、サロン・料理屋などにおける社交

---

3) ティソーのツィンマーマン伝のドイツ語翻訳版の書誌情報は以下のとおり。Tissot, S.A.D.: J.G. Zimmermann's Lebensgeschichte. Aus dem Französischen übersezt. Zürich 1797; Tissot, S.A.D.: Leben des Ritters von Zimmermann, Hofraths und Leibarztes in Hannover. Hannover 1797.

4) 斎藤、前掲論文、347(66)-348(65) 頁参照。

5) 同上、348(65) 頁。

6) Vgl. Briese, Olaf: Schwarze Geselligkeit. Philosophische Gegenmodelle in Aufklärung, Romantik und Nachromantik. In: Riskante Geselligkeit. Spielarten des Sozialen um 1800. Hg. v. Günter Oesterle u. Thorsten Valk. Würzburg 2015, S. 25-45, hier S. 26ff.

7) シュテファン＝ルートヴィヒ・ホフマン『市民結社と民主主義 1750-1914』山本秀行訳、岩波書店、2009 年、20 頁参照。なお、「社交」については以下の書籍も参照。Stollberg-Rilinger, Barbara: Die Aufklärung. Europa im 18. Jahrhundert. 3., aktualisierte Auflage. Stuttgart 2018, bes. S. 114-146; Oesterle, Günter u. Valk, Thorsten: Einleitung. In: Riskante Geselligkeit. Spielarten des Sozialen um 1800. a.a.O., S. 9-23.

8) Ebd., S. 9.

は知識の交換の場として機能した。[9]「社交の世紀」ともいえる 18 世紀後半、1784 年から 1785 年にかけて出版された『孤独について』は、第 1 巻で世間の仕事・義務にかかずらうことへの疲れに端を発する孤独への渇望を話の糸口としている。[10] ツィンマーマンは孤独を求める気持ちが人間にあることを認めているのだ。社交が重要視されていた時代にあって『孤独について』は、医師であるツィンマーマンが、一般市民がこころを管理するのに役立つように書いた本であったともいえる。[11]

ツィンマーマンが『孤独について』において、人間が避けては通れない社交生活のなかに潜む危険と、極端な孤独に潜む危険とを同時に示すことで下した結論は、人間の幸福のためには「孤独と社交の適度な関係」を探ることが必要という「常識的な」ものであった。[12] 孤独の欠点を本格的に主題として取り上げた記述が始まるのが、第 2 巻の冒頭、第 5 章、すなわち今回訳した部分からである。この章では特に学者（Gelehrte）が例に取り上げられる。学者が社交界になじまない様子を描きだしたり（翻訳 71 頁以降など）、また限られたひとびととの交流しかない孤独な大学生活に慣れてしまったために、「今世紀の啓蒙に興味を示さない」（翻訳 71 頁）学者が生まれてくるという、孤独がある種倒錯した存在を生みだしてしまう状況を描きながら、ツィンマーマンは極端な孤独は学者にも害をなすことを示す。

ツィンマーマンは本書において孤独の欠点をも論じていることが、この著作が絵空事（Roman）ではないことの証拠であるかのように記述する（翻訳 63 頁）。本著作の特徴は、孤独を論じるにあたって、その利点をいう場合であれ欠点をいう場合であれ、無数の例をあげていることであるといえる。それらは膨大かつ多分野にわたる資料や逸話からなっており、ほ

---

9) Ebd., S. 10. こうした場所における知識の交換は、学問的な知のやりとりという確固としていた形式には対抗するものであったという。

10) Vgl. Zimmermann, Johann Georg: Ueber die Einsamkeit. 1. Theil. Leipzig 1784, S. 1f. この版には、第 1 章の冒頭に挿絵があるものとないものとがあり、両者には頁数に異同がある。ここでは第 1 章の冒頭に挿絵がある方を使用した。

11) Vgl. Briese: a.a.O., S. 32.

12) 斎藤、前掲論文、340(73)-341(72) 頁。

とんど錯綜しているともいえよう。[13] 本抄訳部分でも、歴史上の人物たちの逸話をさりげなく挿入するようなところにその片鱗が見える。そうした歴史的なエピソードに基づくようなもののみならず、本抄訳部分では、ツィンマーマン自らの経験で得たと思われる挿話も見ることができる。

ツィンマーマンは学者の心情に寄り添いながら、社会になじめない学者の姿を描きだしていく。とはいえ、そうした学者の生態を描こうとするツィンマーマンの試みも、伝えられてきた逸話やツィンマーマンが推し量った学者の心情に基づいたツィンマーマンの語りによる学者のイメージの構築でしかない。そうでなくても、社交のあり方は地域によって異なるため[14]、ここでの社交場での学者の扱われ方や振る舞いは、ツィンマーマン自身が赴いた社交場――たとえば彼が長期間過ごしたハノーファーの――で体験したことがベースになっていると考えられ、その意味ではここでの学者の描写は、ツィンマーマンの主観でしかないかもしれない。しかし、この書物が当時エカチェリーナ 2 世にまで評判が届くほどにきわめて広く読まれたということを踏まえると、この書物が他の地域における学者のイメージにまでも大きな影響を与えた可能性、もしくは、以前から学者につきまとっていたイメージが、この書物によって裏書きされるようにして確固たるものにされた可能性は高い。文学における学者諷刺を研究したアレクサンダー・コシェニーナによると、時代ごとに学者についてのイメージというものが存在していて、それは後続の世代によって順次修正されていくという形で続いていくという。[15] ツィンマーマンの描きだす学者のイメージも、その連綿と続いていくなかのひとつのパーツをなしていることは間違いないだろう。

ツィンマーマン自身も、学者とひとくちにいっても、様々な学者がいるということはみとめている（翻訳 67 頁）。それは承知のうえで、「孤独」というテーマに沿う形でそのイメージを整理し、彼の目から見た学者とい

---

13) 同上、341(72) 頁参照。

14) ホフマン、前掲書、31 頁参照。

15) Vgl. Košenina, Alexander: Der gelehrte Narr. Gelehrtensatire seit der Aufklärung. 2. Auflage. Göttingen 2004, S. 10f.

う人間の姿を描きだす。そして、『孤独について』によって浮かび上がってくるのは、その狷介さゆえに世間からはじき出され、ひとりで、もしくは数少ない仲間たちとのみ生きていくしかない学者の姿である。

この著作中の議論では、「ひとびとのために書き、ひとびとに影響を与えるだけの能力、もしくは使命を持つ」（翻訳 73 頁）という、学者という存在の重要な意義についても触れられている。しかし同時に、その使命や思考法などではなく、いわば社会的位置づけという観点からも学者のあり方について切り込む。単に社会になじむことのできない学者像を強調するだけではない。職業としての、もっと露骨ないい方をすれば、商売としての学者のあり方までも示唆しているのである。そのことは教授を自分専用の問屋を抱えた店の主人になぞらえて説明しているところに顕著にあらわれている（翻訳 69 頁）。この部分ではそうした態度の学者に対する批判的な調子が現れているのは確かであるが、別の箇所では、スイスではすぐれた能力があっても相応の評価が得られないことへの不満も隠さない（翻訳 77 頁）。いわば食べていかなくてはならない学者の生活の部分が描かれ、学者という生き方のひとつの実態を提示している。ツィンマーマンの『孤独について』は、18 世紀の社交の問題を考える場合のみならず、そこに透けて見える当時の風俗・習俗を感じ取ることのできる貴重な資料として活用できる可能性も秘めているのだ。

（慶應義塾大学大学院後期博士課程）